

「ニュージージーランドと公益」

武田 真理子



楽しい時間を過ごすことが
当たり前前の光景となってい
る。

大学や図書館などの公共
施設も一般開放が原則で、
私のような外国人であつて
もさまざまな資料や情報へ

東北公益文科大学にはニュージージーランド研究所がある。ニュージージーランドの総合的・専門的調査および研究を行う日本で最初の研究所である。

研究所誕生の背景には、ニュージージーランド文献・資料、スタッフの充実という環境面での整備があるが、設立の最大の理由は、ニュージージーランド研究が「公益学」に大きく貢献する可能性を持っているということである。

私自身、ニュージージーランドの社会保障の研究に取り組んでいる。ニュージージーランドは一九三八年に世界で最初の包括的な社会保障制度を築いた国であり、以来、職業、性別やエスニティー（民族性）に関係なく、すべての人が同じルールの下で病気、失業、老齢、障害といった生活上のリスクに対する保障を受けるしくみを実施してきた。

最近では、一九八〇年代後半以降の大胆な行財政改革が日本でも報道されたが、ニュージージーランドは一八四〇年の建国以来、世界を驚かすような施策を多く実現させてきた国である。

遠く一八七三年には世界で最初の八時間労働制を定めた女性雇用保護法が制定され、一

八九三年には世界初の女性参政権が認められた。近年では、一九八七年の非核法や、一九九一年の自然環境を守る権限と開発に関する発言権を住民に保障する資源管理法の制定などが、世界の注目を集めた。

南太平洋の小国でなぜこのような公益的視点に溢れた数々の施策が実現してきたのか。この素朴な疑問を解いていきたいという思いでニュージージーランド研究を続けている。

ところで、ニュージージーランドでは、制度や政策だけでなく、地域や市民生活の中にも公益の視点が多く存在する。

ニュージージーランドを訪問する度に感じることは、滞在中に得られる不思議な開放感と居心地の良さである。例えば街へ買い物に出かけて、ちょっとお茶でも飲もつかなという時、カフェ選びにあまり気を使う必要が無い。どこも比較的値段が安いということもあるが、「年齢相応の店」、「女性の入りやすい店」、などど悩む必要性を感じないからである。子連れであるのが、高齢者であるのが、どんな人でも行きたいところへ気軽にいくことのできる空間が街全体につくられている。パーやディスプレイでも、さまざまな年齢の人が一緒に

のアクセスが可能である。

また、都市近郊には必ず大きな公園や景色の良い憩いの場があり、手間をかけずに自然と触れ合い、心と身体を休めることができる。公園では花づくりが盛んで、季節ごとに訪れる楽しみがある。

これらはあくまでも一例でしかないが、町や地域において目に見えない「バリア」をなくしていくこと、そして誰もがゆとりを感じられる空間をつくっていくことの重要性を、ニュージージーランドでは感じる事ができる。住民、商店、行政などがそれぞれの立場で居心地の良さを追求している結果であろう。

そして、その居心地の良さは多様性や違いを尊重することから始まっている。社会保障や教育といった制度においても、多様性の尊重によって社会におけるさまざまな障害を乗り越えていこうとする工夫が多く見られる。

今後、同僚や学生と共に、より多くの人が暮らしやすい社会づくりという視点でニュージージーランドへの理解を深めていきたい。そしてその成果を大学づくり、ひいては地域づくりにも役立てられればと思つ。

(東北公益文科大学講師・鶴岡市)